三一新書 636

戦争と人間

10

劫火の狩人　第二部

五味川純平著

三一書房

五味川純平
ごみかわじゅんぺい

1916年　満洲に生まれる
東京外語英文科卒
満洲にて就職，応召
1948年　引揚げ
著　書　『人間の條件』『自由との契約』
『歴史の実験』『孤独の賭け』
『アスファルト・ジャングル』
いずれも三一新書
現住所　東京都渋谷区神宮前1—15—3

戦争と人間　10　　定価　300円

1968年11月20日　第1版発行

著　者　© 五味川純平
1968年
発行者　竹　村　一
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　本間製本株式会社

発行所　株式会社　三　一　書　房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京(291) 3131～5番
振替東京　84160番
郵便番号　101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　三一新書 636

戦 争 と 人 間

10

劫 火 の 狩 人

第 二 部

五 味 川 純 平 著

三 一 書 房

戦争と人間

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

劫火の狩人　第二部

1

夏の宵はゆっくりと肌を撫でるように来るから、いけなかった。冬だと、陽が傾くと俄かに夜になる。寒々としてあわただしくはあっても、甘酸っぱい感傷で人を包むようなことはない。

由紀子は、部屋の窓から、夕方になって緑色がしっとりとした落ちつきを取り戻した庭の芝生を見下ろしていて、変に息苦しいような気持のうねりに悩まされていた。ときどきこうなる。何不自由ない身で、贅沢な愁訴である。したい放題のことをしてきて、ついぞ満ち足りたことがない。便々として充実感のないままに歳月をすごしてきた。二十代の最後の年といえば、婚期という通念からはもう若くはなかった。だが、結婚する気になりさえすれば、引く手はいくらでもあったのだ。する気になれないのが厄介なのである。何を待っているのか、それが自分でもわからない。いいかげんに自分を投げ出してみたが、柘植(つげ)とも矢次(やつぎ)とも失敗した。あるいは自分を投げ出しきれなかったということかもしれない。

由紀子は、散歩に出て、くたびれるまで歩きまわってみたくなった。出かけようとすると、あいにくなことに、兄嫁の充子(みつこ)が玄関まで追って来て、

「お散歩？　ごいっしょしたいわ」

と云った。

「……どうぞ」

拒わるのもおとなげない。素気ない返事がせいぜいのところである。

充子が英介に嫁いだのは昨秋のことで、まだ九ヵ月にしかならないが、由紀子たちとの間で欠点をみつけ合うには充分な時間がたっている。由紀子は、充子の甘ったるいものの云い方と、化粧を念入りにする割りにどことなくだらりとしていて英介の体臭が臭うようなのが、かなわないのである。充子の方は、由紀子がときどき示すとりつくしまもないほどの冷淡さを小づら憎く思っているにちがいなかった。

二人は大通りの並木道を並んで歩いた。

夏の宵の若い女の散歩姿は、のどかで、あでやかである。不潔な魂や小ざかしい打算がそこにあるかもしれぬのに、香ぐわしい匂いが漂っていそうにさえ見える。ことさらにそう見えるのは、閑静な町のせいでもあろう。北支で重大な事件が発生して、この町に屋根を連ねている邸宅の主人たちがその成行きに強い関心を抱いていることなど、まるで嘘のようである。

もっとも、一般の日本人は、北平郊外の蘆溝橋で日支両軍が衝突したという報道に接しても、あまり驚かなかった。軍事行動を意味する事件だの事変だのには慣れてしまっているのである。満洲事変以前から、一つの事件が起きてそれが片づくか片づかぬうちにまた次のが起きている。珍しいことではない。事件・事変のない日はなかったと云ってよい。事態が紛糾するかに見えても、曲りなりにも日本の主張が通ってきている。少なくとも一般の人びとにはそう見えた。だから何もあわてることはなかった。

つい六月の下旬にも、ソ満国境・黒竜江のカンチャーズ島で日満軍とソ連軍との衝突事件があった。これは半月足らずで片づいた。向うが撤収したのだ。新聞は「〝東亜安定勢力〟日本の威力発揮」と書いた。(註二) 小紛争はそ

れ以前にも覚えきれないほどあった。
七月七日の蘆溝橋での事件は、相手が中国軍である。大したことはない、と呑んでかかっている。そういう認識の仕方が一般化している。
伍代由紀子も関心が薄い点では一般の人びとと変りはなかった。この事件が大戦争の発端になろうなどとは考えもしなかった。関東軍の一部兵力が北支へ増援に向ったと聞いたとき、事件の規模を考えるよりも、柘植がまたかつての上海事変のときのように戦地へ出征したのではないかと考えた。柘植は、前年の春、二・二六事件のあと、満洲国の軍政部へ転出したきりであった。便りもなかった。由紀子の懸念は、したがって、全くの空想なのである。懸念と呼ぶのは大袈裟すぎるかもしれない。柘植のことが絶えず念頭にあったわけではない。情事の記憶が、何年も前に観た映画のある場面が勝手に思い出されるように、甦えってくるにすぎない。
「……今夜は英介さんおそいんですのよ」
と、充子が、きかれもしないのに、自分の夫のことをさんづけで話した。
「浅倉の父といっしょにどこかにお招ばれですって」
「そう……」
「英介さんたら、とても張りきってるの。今度の事変で日本がもう直ぐ北支を押えてしまうでしょう。そうしたら、お父さまが反対なすってもなんでも、伍代を北支へ推進させるんですって。父もとても乗り気なの。浅倉の全力をあげて英介さんの後押しをする気でいるらしいわ。なんですか、満洲では伍代はもう立ちおくれなんですって？」
「……父には父の考えがあるんでしょうよ。伍代の采配はまだ父が振っていますからね」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「……お父さまは英介さんに反対なんでしょうか」
「兄がそう云うんなら、そうなんでしょう」
由紀子はうるさくなった。不思議であった。だれか男と仕事の話をするのなら違和感を生じないのに、女同士では変な工合なのである。相手が充子だからとは限るまい。
充子は義妹の冷淡な云い方にも辟易しなかった。
「俊介さんが東京勤務にお変りになるんですってね？」
「……そうらしいわ」
「英介さんはね、俊介さんがおみえになったら、びしびし鍛えるんだなんて云ってますのよ」
「どうかしらね」
由紀子が唇を僅かに歪めた。
「手に合わないかもしれないわよ」
「どうしてですの？」
「……俊介はね、気持はやさしい青年だけれど、質の硬さからいったら、お兄さんよりずっと硬いかもしれないの」
「そうかしら。英介さんはそうは云ってなかったわ。そんなに堅い人なら、どうしてあんな事件を起こしたりしたのかしら……」
由紀子は切れの長い眼を横に辷らせただけで、黙っていた。英介が充子に云わでものことを云ったのだ。
充子には由紀子の軽蔑的な表情もこたえなかった。

「あの方、その後どうなすって、久滋温子さん……いえ、狩野温子さん」
「……通州にいらっしゃるわ」
「それ、どこですの？」
「さあ、どこかしら……」
充子の饒舌がとまった。由紀子の意地悪さに面くらったらしい。
ちょうどそのとき、由紀子は、電車道を渡って来た男が、まだかなりの距離をおいて会釈したのに気づいた。見憶えのある顔だったが、とっさには思い出せなかった。その男はそばまで来て立ち停った。
「お久しぶりでした。お忘れですか」
男が云った。陽に灼けた、素朴な顔立ちである。
「満洲でお目にかかりました高畠です」
「ええ、ええ、憶えていますわ」
由紀子の声が珍しくはずんだ。なぜはずんだか、思い当る節はない。この男に会ったのは、前の上海事変がはじまる直前に父と上海から奉天へまわったときのことだから、もうまる五年半になる。実直そうな最初の印象があっただけで、格別深く由紀子の心の奥に席を占めているはずはないのである。
「……いつ、いらっしゃいましたの？」
「今日です。社長の御用命でお宅をお訪ねするところです」
「そうでしたの。宅はこちらです。どうぞ」
由紀子は何のためらいもなしに折り返して歩きだした。

「……こちらは兄嫁です」
歩きながら由紀子が云った。
「兄のことで、その節は……」
充子は、兄のことというのを、まだ知らない。

2

「どうです、北支の事変で関東軍の様子は」
由介が高畠にていねいに尋ねた。
「強硬なようです。香月中将が天津へ軍司令官として赴任される途中、京城と新京へ寄って行かれました…」
高畠は由紀子が接待のために卓の上にさし伸す腕のしなやかさとその肌理のこまかさが眩しいようであった。素子を失ってから女気が切れてしまっていたせいかもしれなかった。
「……東京を出発されるときに陸軍大臣か参謀総長からどのような内意を受けて行かれたか存じませんが、新京の社長のお話では、朝鮮では小磯軍司令官が、新京では植田軍司令官以下幕僚まで、かなり強硬意見を香月中将に注入したそうです」
由介が大きくうなずいた。ありそうなことである。

「北支の現地軍はどうです？」
「これも強硬派が支配的なのではないですか。現地から飛んで来た和知参謀などむやみに強硬論をぶっているようではありませんか。冷静な軍人もいるはずですのに、そういう人の意見は全然表面に出て来ませんでしょう。私、おかしいと思うのですが、現地細目協定の内容が新聞に発表されましたのに、まるでそれをぶちこわしたいとでもいうような記事が堂々と並列的に出されていることです。これでは現地での橋本参謀長以下若干の軍人の善意な平和的努力も無駄になります」
「……そうだね。軍人さんは戦争するのが商売だから、和平協定が出来ては面白くない人の方が多いだろう。近ごろでは、民間人にもそういうのがいますよ。喬介はどうです？」
「社長も、現在では一撃論です。ただ、軍人さんとちがうところは、大兵を一挙に動かして北支を至短期間で平定する。あとは事態を急速に収束するということです。カンチャーズ事件が起きたときには、心配されたようでした。関東軍の兵力では極東ソ連軍に対抗できませんから、日支間に紛争が生じないように真剣に憂慮されておられたようです。しかし、カンチャーズ事件でソ連側が撤収したということは、ソ連内のトハチェフスキー元帥粛清などによる国内混乱がわれわれの予想以上に深刻で、満洲へ手出しをする余力は現在のところないと考えてもいいということなのでしょう。そこへ北支の事件が起きましたから」
「一撃を加えるには好機だというわけですか」
「新京の社長の御意向はそうです」
「君は？」
由介の穏やかな表情のなかで、眸がほんの一瞬閃めいた。

由紀子は由紀子でオードブルを皿に盛りながら、高畠がどう出るかを待った。
「私は反対です」
高畠が淡々と答えた。
「日本は満洲をさえ治めかねているのですから」
「……そう。あんたでしたね、匪賊で奥さんを亡くされたのは」
由介のこのことばで、由紀子ははじかれたように高畠を直視した。
「……はい。お目にかかってから、暫くあとのことでした。しかし、それだからというわけではありません。満洲の開発には、日本の国力に、とりわけ、思想と申しますか、考え方に極めて狭い限界があるように思います。概して立身出世主義の出稼根性しかありませんから。この上北支にまで手をひろげては、それでなくても稀薄な政治力、経済力をますます薄くして、拾収のつかないことになるでしょう」
「私もあんたの意見に賛成だな」
由介が影のような笑みを湛えた。
「私の聞き知ったところでは、軍事力からいっても無理がある。十五個師団一挙動員、五十五億の戦費をつぎこむ覚悟ならともかく、実際には十五個師半年分の消耗にしか耐えない状態だそうだから。弾薬も足りなければ、小銃のような小火器さえも足りんのだそうでね。喬介はその辺の事情を知っていそうなものだが……」
「気の強い方ですから、無理は百も承知でおっしゃるのかもしれません。内地はどうなのですか？　軍の中央には作戦部長として石原少将がおられますが」
「どうなるかね。あの人のは、ソ連に備えて二十年間国力を培養しようということらしいが、国力培養という

奴は地味で目立たぬ苦労が多いでしょう。戦争をはでにやって急速に膨らんでいかにも景気がよく見えるのとは大分ちがうから、大向うに受けないね。あんたがさっき云った現地軍で強硬派が支配的になるだろうというのと同じに、中央でも目先きの景気のいいことを云う強硬派が大勢を占めるだろう。そう思いますね」

「……十五個師半年分の戦力しかないのでは、いくら北辺に脅威なしという情勢判断が当っているとしても、どうにもならないではありませんか。支那の民族意識は満洲事変のころとは較べものになりません。仮りに日本が北支だけで事を納めるつもりでいても、そう一方的に都合よく運ぶとは思えないのですが」

「私もそう思いますよ」

由介が幾つか合点した。

「しかしね、戦争をやりながら戦力の増強を図る、産業の開発を強行するという考え方に軍・官・民が統制されるというか、集中させられる時代が現に到来しつつあるようだね。アメリカのように充分な設備があって、稼働率が何パーセントか低いのを百にまで持って行けば非常の需要にも対応できるというのとはちがうでしょう、日本の場合は。日本は基幹産業の設備からしてかからなければならないのだから、戦争の消耗を補ってなおかつ蓄積するなどとは無理な話なんだが、その無理を敢てするのが愛国心だということにされそうだね」

「……愛国心の押売りをする奴に愛国者がいたためしはないんですが」

「そりゃそうだ。国に実益をもたらす何事をもなし得ないから、ことばだけ威勢のいい愛国心を売って歩くのでね」

由介がにがそうな笑いをこぼした。

「……ところで、そろそろ本題に入るとするか。君にわざわざ出張して来てもらったのは、君も耳にしてるだ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com